

教授・学習部門

教授・学習研究の動向

大野木 裕 明

(福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター)

1. 概観

本稿の目的は、日本教育心理学会第44回総会発表論文集(2002年)および『教育心理学研究』(2001年7月～2002年6月)を中心にして、この1年間のわが国における教授・学習研究を概観し展望をおこなうことである。

昨年、一昨年に教授・学習部門の執筆を担当した栗山(2001)、藤村(2002)も指摘したように、今回もまた、この部門に収録された発表論文数は多かった。その内訳はTABLE 1のようになったので、以下にみていきたい。TABLE 1において「幼」とは、幼児に対する観察、実験、調査等を実施したことによる発表をあらわす。以下、略記は脚注に示した。なお、この集計では、たとえば大学生を調査対象として中学生に関する問題を扱ったものは大学生として数えて表示してある。これは別途、中学生として分類することも考えられるが、ここでは計数的な全体傾向を知る目的のためにはそれほど影響していないので略した。

TABLE 1の集計を試みるにあたって内容を検討したが、これらを筆者なりに概観すると、大きな特徴は少なくとも12点あった。これらのうちのいくつかは昨年以前と同様であり、他のいくつかは今回になって傾向が加速したものである。(1)から(6)は主として件数に関することであり、(7)から(12)は主としてテーマやアプローチに関することである。

- (1) 教授・学習部門の発表件数は他部門と比較するとかなり多かった。
- (2) 幼児、小学生、中学生、高校生、大学生、社会人(成人)と6分してみると、幼児を対象とする研究は少なかった。
- (3) 同様に、中学生、高校生を調査対象とする研究は少なかった。

- (4) 同様に、大学生以上の年齢を調査対象とする研究が過半数を占めた。
- (5) 同様に、異なる2つ以上の年齢区分にまたがった調査・実験研究は少なかった。
- (6) 小学校、中学校、高等学校等教員による発表が増加した。
- (7) 理論的研究はほとんどなかった。
- (8) 算数、理科等を扱った教科の心理に関する研究では、例年通り、特定の教科書や、その単元と直結する報告が少なかった。
- (9) 大学生以降(成人、社会人を含む)を調査対象とする研究は大きく2分されていた。1つは大学生そのものを対象とする研究であった。もう1つは、成人データとして手近な大学生をデータ提供協力者としてなされた研究であり、つまりは大学生でも成人・社会人でも差し支えないとみられる研究であった。
- (10) 大学生を調査対象とする諸研究の中には、心理学や教育心理学関係の授業研究や指導法、大学生の学習意欲に関する研究が多くみられた。
- (11) 大学生を調査対象とする諸研究の中には、教授・学習というよりもむしろ、言語や記憶等に関する基礎的なメカニズムを扱った研究が多くみられた。
- (12) 異文化に関する研究、外国との比較に関する研究は少なかった。

2. 教科の心理

ここでいう教科の心理とは、小学校算数や、中学校国語のような教科(ただし、総合的な学習の時間、道徳等を含む)について、(教育)心理学的な方法論に基づいておこなわれた報告をあらわす。具体的には、その教科と関わる学習者論、その教授法、その学習法、その教授＝学習過程お

TABLE 1 教授・学習部門に掲載された研究の調査対象の内訳(第44回論文集)

幼	小	中	高	大	社	理論	不明	幼大	小中	小中高	中高大	高大	大院	大社	合計
3	30	12	12	65	10	1	4	1	2	1	1	1	7	4	154

幼：幼児 小：小学生 中：中学生 高：高校生 大：大学生(本表では専門学校生、短大生を含む) 院：大学院生 社：社会人(成人を含む) 理論：理論的研究 不明：年齢の記載なし

よび関連要因等を含む。教科教育学研究者の教材論は含めない。

(1) 国語

作間 (2002) は、小学4年生を対象として、作品「ごんぎつね」を読んだ感想を自由記述法によって求めた。内容を論理的に検討したところ、「ごんが改心した」「かわいそう、かなしくなった」等、作品全体の要点と感想が示されていて、そのような主題で物語を読んでいること、つまり児童は読みの初期の段階から彼らなりの主題把握をしていることがうかがわれたとした。

神田 (2002) は、小学5年生が物語文読解を深める要因の効果をみるために、劇づくり群、グループ読み群の2群を設定した授業実験をおこなった。劇づくり群は、学習方法決定のための話し合い→グループ内で通読・内容理解→劇の練習→グループごとの劇上演→まとめを書くという手続きであった。グループ読み群は、学習方法決定のための話し合い→グループ内で通読・内容理解 (場面ごとにおいて時間をかける)→グループの進行状況の報告・授業者による調整→グループごとの発表→まとめを書くという手続きであった。授業後の文章理解テスト、授業者による児童の参加度に関する評定から、劇づくりは参加度の低い児童の深い理解に有効であるとした。

佐藤・松島 (2002) は、中学生を対象として、説明文の書き手が読み手からの現実のフィードバックを受けることによって、文章の書き直し過程や文章そのものがどのように変化するかを検討した。2名の中学生がペアになり、中学3年生の生徒が幾何学図形を説明する文章を書き、中学1年生生徒がそれに基づいて図形を描画した。文章を書く条件群は3つあり、それらは図形をできるだけ正確に言葉で書く記述群、図形を中学1年生が正確に描けるように文章を書く伝達群、およびフィードバック条件群であった。記述群、伝達群では、原図と最初の説明文を提示して全文を書き直すように求めた。フィードバック群では、これに加えて中学校1年生が描いた図形も提示した。結果として、フィードバック群が他の2群よりも正確な描画を描き、多くの加除修正をおこなうという知見が得られた。

木村・丸山 (2002) は、高校1年生における漢字の書き取りについて、その誤答パターンの分析をおこなった。授業で使用している教科書から抜き出した漢字について、小テストを実施、得られた誤答を分類した。誤答を10の分類カテゴリーに分別し、頻度について統計的検定にかけた。よく間違えるパターンは明らかであった。ありもしない形を書いてしまう誤答 [これを、形態 (非存在) とした。]、同じ音の別の字を書いてしまう誤答 [これを、音

韻 (同音) + 形態 (存在) とした。]、似た音の別の字を書いてしまう誤答 [これを、音韻 (類似) + 形態 (存在) とした。] 等が多かった。これらのことから、漢字の指導には、漢字の持つ意味の理解が重要な課題であると考察した。

山崎 (2002) は、高校2年生を対象として、カット・イメージ法の研究をおこなった。この方法は、「小説の内容を一連の画としてイメージし、それによって本文を分割せよ」というカット・イメージ指示による読解指導法のことである。期末試験の成績から均等な2群を設定し、一方をカット・イメージ指示群、他方を段落分け群 (単純イメージ群) として、小説の読解に関する授業実験をおこなった。理解度テスト、一週間後の内容に関する自由再生の結果からは、群間には差はみられなかった。しかし、本文分割 (カット) 数によって詳細な検討を加えたところ、カット・イメージ多分割群は、理解度テストの得点、場面得点が高かった。

(2) 算数・数学

算数・数学は、教科の中ではもっとも報告の多かった教科であった。岡本 (2002)、多鹿 (2002)、吉田 (2002) をはじめ、小学校算数科と関連する研究だけでも10件以上の報告がみられた。

算数文章題が正しく解けない原因の1つに、知識があっても問題場面でその知識を適切に使えないということがある。坂本 (2002) は、昨年発表した訓練実験の成果が、その1年後のポストテストにおいても継続して認められるのかどうかを報告した。昨年の発表では、小数の割合文章題で正しい式を立てられない小学5年生を対象に、既有知識を活用させる訓練実験をおこなって、ポストテストで割合の第3用法を扱う課題で訓練の成果を確認した。1年後の小学6年生に再度、同じ課題を実施したところ、訓練を実施した割合文章題に限っては解決支援訓練によって成績の低下を防ぐことができたとした。

中澤 (2002) は、小学5年生を対象として、小学校算数科の分数の通分について実験的研究をおこなった。学習マンガ教材の効果性について他の教材と比較検討すると、説明文の効果がもっとも有効であり、ついでマンガ教材、小説教材の順になった。

植阪 (2002) は、中学2年生を対象として、数学の文章題を解く時に図表を利用することが解決に有効であるという意識を彼らが持っているかどうか調べた。「図表は解決に有効であるという認知」をみる有効性得点と、「図表をかくことが難しいと感じる意識」をみる質問紙を実施した。その結果、困難性認知の要因が図表の質に影響を及ぼすという知見等が得られたとした。

小野寺 (2002) は、高校1年生に対して、「奇数と奇数の

和は偶数である」ことを証明する課題への解答を求めた。事前－事後の間に挿入された3条件のうち、第1条件群は個数の和、第2条件群は奇数と奇数の差の条件設定をした。第3群は対照群であり、連立方程式を使用した。そして、第1条件群による証明は一般性を欠く文字式の証明であるとの観点から、生徒の答案の内容に論理的な検討を加えて文字式使用の変化パターンを詳細に分析した。

(3) 理科・社会

金田(2002)は、小学5年生の児童を対象として、混合液体の温度判断に関わるインフォーマルな知識の要因と、文章解決方略の要因についての関連性について検討をおこなった。前者では、35℃のお風呂の温度について、その温度よりも高いお湯、低いお湯、同じ高さの温度のお湯を付加したときの、それぞれの場合の温度の高さについての判断を選択肢によって尋ねた。後者では、30℃の水1リットルの中に、40℃のお湯1リットルを注ぐと何リットルの何℃のお湯ができるかという文章題について記述式で回答を求めた。結果であるが、インフォーマルな知識を想起することが文章題の解決方略に及ぼす影響は、ほとんどみられなかった。これら児童は正しいインフォーマルな知識を持っているが、その知識は混合液体の温度判断に関する文章題解決には、うまく使われていない可能性があると考えられた。

小林寛子(2002)は、小学4年生を対象とした「体験型学習」の授業実験をおこない、話し合い活動の有無(2)×理解目標表示の有無(2)の実験計画によって、流水の三作用(浸食、運搬、堆積)に関する発見や理解度に及ぼす効果を調べた。児童の発見に関する自由記述法の分析からは、分散分析により理解目標明示の主効果が5%の有意水準に近かった。理解度テストの分析からは、話し合い活動の要因の主効果がみられた。理解目標明示の主効果は5%の有意水準に近かった。そして、話し合い活動は、個人の発見を他者の発見と関連づけることで理解の深化に影響したのであろうと考察した。

荒木(2002)は、中学1年生理科における生徒の関心・意欲の実態を調べた(調査1)。そして、学習内容、班学習、自由研究等よりもむしろ実験・観察が好き嫌いの主因であるとした。これらを踏まえた調査2では、授業の中に体験的学習の時間(観察、実験)を組み込んで授業実践をおこなった。そして、生徒からの感想には、他単元よりも関心や意欲の感じられる感想が多くみられたとした。

湯澤・松内(2002)は、中学校理科における「力と速さの関係」について授業実験をおこなった。実験群は、最初に「力と速さの関係」(数学の知識)を教授され、その数

学の知識を用いて現実的な課題の解決をおこないながら物理法則を学習する条件群であった。統制群は、実験を通して物理法則を帰納しながら学習する条件群であった。結果は、実験群の方が統制群よりも、関数を用いた応用的な問題の成績が良かった。また、実験群の方が、授業への意欲、グループでの協力に関する自己評価が高かった。

山縣(2002)は、回路内の電流は一定であるという科学的概念をもっているのにもかかわらず発熱体で電子は消費されるといった矛盾した解答をする高校1年生について授業実験をおこなった。電流のメンタルモデル(有無)×一貫性(有無)×学習目標志向性(課題志向・自己志向)の分散分析によると、志向性の主効果と一貫性×志向性の交互作用がみられた。科学的に正しいかどうかにかかわらず、一貫したメンタルモデルを用いて解答をおこなっている生徒の方が自己志向性が高かった。

昨年の概観(藤村, 2002, p.98)で指摘されたように、今年もまた社会科に関する報告は少なかった。梅本・中川(2002)は、小学校5年生社会科について、モニタリング自己評価を用いた教授法の効果を検討した。モニタリング訓練の有無(2)×小集団討論の有無(2)の4つの実験条件が設定された。単元は、「日本の農産物と耕地」「水産業の盛んな地域」であった。ポステストに関する分析から、モニタリング自己評価訓練法は、モニタリングと小集団討論が学習遂行に相乗作用をもたらすことが示された。到達度自己評価と小集団討論は、学習遂行に相反する作用をもたらしたとした。

小池(2002)は、高校生を対象として、1)質問紙による学習動機、学習行動、歴史態度、2)中間・期末考査による歴史知識、および小テスト・中間考査による歴史的思考力を調べた。そして、高校生の学習行動による歴史知識・歴史的思考力のモデルによる分析をおこなった。これは大学生を調査対象としておこなった前報とは異なる結果であると考察した。

(4) 外国語(英語、日本語)

益谷(2002)は、中学1～3年生に対して、彼らの既習単語と未習単語のリストを示して、その発音と意味を記述させた。そして、既習語、未習語について単語の音声化が意味記憶とどのような関係にあるかを検討した。未習語の発音可能数は25%→59%→68%となり、学年と共に上昇した。そして、2年生の700語程度から音声のパターンが帰納できるのではないかと考察した。

安藤(2002)は、中学生に対して、英語学習の動機づけをみる尺度、自律性支援の認知尺度、自己決定意識尺度の質問紙調査をおこなった。そして、自己決定意識得点

と、英語学習の動機づけに関する内発的動機づけ得点との間等に有意な正の相関関係が認められるとした。

中西他 (2002) は、国立大学の附属中学校でおこなっている個別学習アシスト教室への参加を含む中学 2 年生の学級生徒について、アシスト教室開始前と開始後約半年後の 2 回にわたる質問紙調査を分析した。尺度は、自信・興味尺度、メタ認知的方略尺度、学習意欲尺度であった。調査時期 (2) × アシスト教室参加の有無 (2) による分散分析の結果、学習意欲尺度のうちの達成志向得点において、調査時期の有意な主効果がみられた。

中村・宮原 (2002) は、高校 2 年生女子に対して英検準 2 級の 2 次面接用過去問題を課した。そして、英文聴き取り (リスニング) の速度、ポーズ (休止)、EFT (埋没図形テスト) の関係を調べた。

磯田 (2002) は、大学生に実施したインタビュー (調査 1) をもとにして、中学生、高校生に対する質問紙調査をおこない、文法を学ぶことが、英語文法の問題を解くこと、および聴く、読む、話す、書くの 4 技能に対してどの程度有効であるかどうかを 7 段階で尋ねた。まず、学習者の傾向を探るためにクラスター分析をおこない、7 つの学習者クラスターを識別した。そして、各クラスター別に、文法問題を解くこと、聴く、読む、話す、書くのそれぞれの評定平均値を算出した。それらをみると、7 つのクラスターすべてにおいて、書く、および英語文法の問題を解くことの得点が高かった。また他方で、聴く、話すに関する得点が低かった。

森川 (2002) は、トンガ王国の日本語学習者 (高校生) を調査対象として、日本語学習者 (三言語学習) と非学習者 (二言語学習) の言語態度を比較した。言語態度の測定は、matched-guise 技法によった。測定結果やインタビューの結果から、三言語学習は、言語による優劣、言語による偏見を克服する方向に働いている可能性があると考えた。

(5) 音楽、総合的な学習の時間ほか

中西里果 (2002) は、高校 2、3 年生に対して、ソプラノリコーダーによる演奏指導の教授法について検討した。指導内容は、クレッシェンド・デクレッシェンド、リタルダントの表現課題であった。クレッシェンド (だんだん強く) と説明のある「教科書指導」の条件と、クレッシェンド (風船をだんだん膨らませるように) と書かれた「動きのメタファーによる指導」の条件を設定して、指導結果を比較した。結果であるが、クレッシェンド・デクレッシェンド課題、リタルダント課題ともに、動きのメタファーによる指導が上手であるという評定が多かった。

アレン玉井・柄田 (2002) は、文部省の研究指定を受け

た公立小学校における英語活動について、授業観察をおこない、その特徴を分析した。総合的な学習の時間でおこなわれる国際理解教育、および『小学校の英語活動実践の手引き』等の分析から、総合的な学習の時間→国際理解教育→外国語会話→英語活動という流れを確認する一方、具体的に研究指定校の実態がどうなっているのかを調べた。結果であるが、英語活動としての授業は、授業の展開や教材などが同一学年だけでなく他学年でも共通であること、定型的な英語表現の修得が中心であること、教師たちから児童へ教える時間が多く、児童間の英語によるやりとりの時間が少ないこと等の特徴がみられたとした。そして、これらはコミュニケーション能力を促すことをねらいとした英語活動としては不十分であることを指摘した。

山森・古家 (2002) は、ある中学校における 2 年間 25 回 70 時間の総合的な学習の時間の成果を、カリキュラム開発の観点から検討した。授業の内容は、平和の文化に関するものであり、外部講師の講演、影絵・朗読劇の発表等であった。生徒の感想文を論理分析したところ、1 円玉募金やインターネットクリック募金等の寄付行為といった、実生活における転移が効果性として見られた。実践が受容されない生徒の例も認められ、それについての考察が加えられた。

3. 学校教育における動機づけ研究、テーマ学習等

市原・新井 (2002) は、高校 1、2 年生を対象として、学業的自己概念の自己記述質問紙 (日本語版) を作成し、性差、文化系・理科系 (コース) における違いを調べた。学業的自己概念とは、学業に対する興味・有能さについての自己認知であった。国語的自己概念、数学的自己概念、英語的自己概念、学業一般的自己概念の 4 つの得点それぞれについて、性差 (2) × コース (文系・理系・その他: 3) の分散分析をおこなった。学業一般的自己概念得点では、コース要因の主効果が得られた。英語的自己概念得点では、性差の主効果のみが見られた。国語的自己概念得点と、数学的自己概念得点では、性差とコース要因の主効果が見られた。

金子・守 (2001ab) は、動機づけ研究の動向に関する心理学的研究の動向をまとめ展望をおこなった。金子・守 (2001a) は、1966 年から 2000 年にわたる学習における動機づけに関連する論文を ERIC データベースによってキーワード検索した。そして、統制の所在、内発的動機づけ、原因帰属、自己調整学習、学習方略、自己効力等について計数的な動向の概観をおこなった。さらに、本邦における研究についても、現職教員の視点を意識した考察をおこなった。さらに金子・守 (2001b) では、学習成績・学

習方略と動機づけの関連に関する研究の概観をおこなった。そして、「国内の教育実践者に顔を向けた研究をしてくれることを日本の教育心理学者に強く望みたい」と論じた。

テストについては、村山 (2002)、犬塚 (2002) 等の報告が見られた。村山 (2002) は、中学 2 年生を対象として、歴史の近現代史を題材とした 5 回の授業をおこない、授業のたびに、3 つの実験群に対しそれぞれ同一形式の確認テストを実施した。3 群とは、穴埋め群、記述－非添削群、記述－添削群であった。最後の 5 回目の授業後には、学習方略に関する質問紙調査を実施し、これにより生徒のテスト前の学習方略を把握した。主な結果であるが、記述式テストは、深い処理の学習方略である意味理解的な方略を促進した。穴埋め式テストは、浅い処理の学習方略である暗記方略を促進した。

犬塚 (2002) は、中学 2 年生が事前に他者の文章を評価する話し合い活動をする、事後の作文テストの得点を高く評定するかどうかを検討した。評価を個人でおこなう個人条件、評価を協同でおこなう協同条件、個人で評価後に協同で評価をおこなう個人－協同条件を設定した。結果として、個人－協同条件が個人条件よりも有意に高い事後テスト評点となった。

植木・清河・岩男・市川 (2002) は、テーマ学習における自己制御的活動の支援について考察をおこなった。ここでいうテーマ学習とは、いわゆる調べ学習、課題解決学習、プロジェクト学習等とよばれたタイプの学習であり、児童・生徒が自らテーマを選択し、情報収集をおこない、その結果をまとめて発表する一連の学習活動のことである。この報告は、大学が募集した「遊びと学びゼミナール」に応じて参加した小・中・高校生 9 名とスタッフ 12 名との実践活動をベースにした論考であった。特に児童生徒がどのような内的な知識・技能をもち、それをどう高めていくかという点に焦点が当てられた。活動の流れは、テーマ設定と班編成、取材前の情報収集、職場等でのインタビュー取材、収集された情報の整理とパワーポイントを使ったスライド作成、全体での発表会であった。スタッフが長期にわたって支援してきた活動を自己分析し、また参加児童生徒へ面接をおこなった結果から、自己制御スキルの直接的な教授、モニタリング機能といった点について、テーマ学習への支援の効果がみられたと考察した。

4. 大学における（教育）心理学の授業研究

（教育）心理学の授業研究についての発表がみられた。立木 (2002) は、定性的データについて 2 × 2 のクロス集計表を使用するとき、心理統計の初学者が「比率」「関係」

「原因」といった用語の使用によってどのように解釈が異なるかを検討した。

田中・山内 (2002) は、大学の心理統計法の授業受講生に対して、自分の能力の発達と向上をめざすマスタリー接近目標など 4 つの達成目標志向性が、期末試験の得点に及ぼす影響を検討した。小方 (2002) は、心理学授業の受講大学生に対して、4 つの目標志向性が授業態度、試験準備、成績に及ぼす影響を調べた。藤田・田中 (2002) は、教育心理学の授業において、受講大学生の 3 つの目標志向が彼らの授業評価にどのように影響するかを調べた。また原因帰属や期末試験成績に影響するかどうかを検討した。

教授法については西口 (2002)、宇田 (2002)、向後 (2002) の報告が見られた。西口 (2002) は、教職課程受講の大学生に対して、スキル・アップのためのワークシート利用の効果を検討した。ワークシートは、学校現場の小学校教師が、問題場面で児童に対して言葉かけをするスキルであった。

宇田 (2002) は、これまで、BRD 方式（ブリーフレポート方式）を提案してきた。BRD 方式とは、1 コマの授業において、学習テーマ確認、構想、情報収集、ブリーフレポート執筆の 4 段階の実行を受講生に課す学習指導法である。この方式のポイントは、テーマの困難度が動機づけに影響するとみる点にあるという。そこで今回の発表では、受講生に対して、授業の事前事後に自己理解評定を新たに求めて、受講生自身のフィードバックの充実をはかった。

向後 (2002) は、織田 (1991) の「大福帳」カード方式と、田中 (1999) や向後 (2001) らの質問書方式の比較をおこなった。この心理学概論の授業についての 7 つの評価の観点は両方式ともに高かった。ただ、大福帳を使用するという 1 つの評価観点だけが、質問書使用の授業評価よりも高得点を示した。

5. 大学における授業研究

佐藤朗子 (2002) は、大学の教授法における知識伝達の 4 つのタイプを分類した。それらは、1) あらかじめよく構成された情報提示、2) 情報の構造を学習者に構築させるような提示、3) 文字化・文章化された情報が手元に確保できる、4) 参加しなくとも後から取り返しがきく 4 つであった。そして、これらと学習観 4 尺度間の相関的な関連性を調べた。

佐藤淳 (2002) は、経済学部大学生に対して、経済現象に関わる素朴概念の形成要因の検討をおこなった。コストの発生根拠の明確さと商品の購入可能性の有無の 2 要因の組み合わせから、ホテルの喫茶室のコーヒーの価格

などの4事例を作成した。これら商品販売価格が特殊な場所では通常より高く設定されている4事例と、効用、需要、コストという説明原理の妥当性評定との間で、2要因の分散分析による検討をおこなった。

大島・丸野(2001)は、共同学習の形態について整理し、協調学習についての提案をおこなった。共同学習の形態についてジグソー学習法(Jigsaw Method)、STAD(Student Teams-Achievement Divisions)、Group Investigationを概観し、さらにコンピュータを利用したカリキュラムデザインを提案して、実際に教授効果を検討したところ、それにより学習者の対話が進んだ。

大学の期末テストや期末の課題は、高頻度で経験するストレスの多いできごとである。鈴木・嶋田・坂野(2001)は、大学生におけるテストへの対処行動の経時的変化とストレス状態との関連を調べた。対処行動については、effort状態、distress状態をみる質問紙を用いた。前者は、コミットメント、影響性の評価、問題解決に関する項目、後者は脅威性の評価、コントロール可能性、回避的対処に関する項目からなっていた。ストレス反応については、抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力、自覚的身体症状に関する尺度から構成された質問紙を用いた。定期試験1か月前、1週間前、直前の合計3回の測定をおこなった。結果から、女子学生の不機嫌・怒り得点が男子学生よりも高いこと、自覚的身体症状得点は男女ともにテスト直前に顕著に高くなることが明らかになった。テスト1か月前から直前まで一貫してeffortが低くdistressが高い学生や、一貫してeffortとdistressが共に高い学生で対処行動をおこなう者は、他の特徴を示す者よりもストレス反応が強い傾向がみられた。多くの結果から、テスト1週間からテスト直前までの期間のストレス反応を軽減するためには、distress型の対処をいかに抑えるかが重要であると考察した。平野・大久保・阪(2002)は、大学生と成人(中高年)に対して、コンピュータ不安尺度による調査を実施した。成人(中高年)と大学生との比較から、パソコン苦手意識の群差を調べた。

6. 教育・学習環境としての大学

大学システム、あるいは大学生の内的要因と教育環境としての大学の関係を見ようとした発表があった。杉山(2002)は、学生生活の質(Quality of Student Life; QoSL)に関する尺度の作成を試みた。因子分析の結果から9因子解を採用し、さらにそれらは、大きくは次の3つ、1)大学の施設・設備の快適さ、資格取得支援体制、講義充実度のグループ[施設・立地と授業充実度]、2)演習(ゼミ)の充実、スポーツ・外国語などの自主的学習支援施設、サークル活動支援体制、教員学生コミュニティの

グループ[自主的学習・活動と教員学生コミュニティ]、3)自主的学習指導体制、職員・校友と学生コミュニティのグループ[学習指導体制と職員校友コミュニティ]にまとめられることを想定した。そして、それらと達成感・満足感の関係を調べた。

谷田(2002)は、学生生活の充実度、出席率、18歳人口の大学進学率に関する15変数から、大学生の進学理由6類型および在学理由6類型を立てた。そして、進学理由と学生生活の充実度、在学理由と学生生活の充実度、出席率と在学理由等の相関関係を明らかにした。

高橋・仮屋園・安楽・中園(2002)、安楽・仮屋園・高橋・中園(2002)、中園・仮屋園・高橋・安楽(2002)は、大学生の学習観について、受験時代の学習観、大学時代の学習観、人間の学びが成立する要因について検討した。意識調査を因子分析した結果から、受験時代の学び、大学時代の学び、人間の学びについてのそれぞれの特徴を、能動性、自己実現願望、自己の確立といった側面から把握した。

神藤(2002)は、主として工学部と理学部を中心とした大学2年生を対象として自由記述法による回答を求め、高校から大学へ進学した時に学業面ではどんなことで驚いたかを調べた。結果は10のカテゴリーに分類された。多かったのは「授業運営システム」についてであり、「授業に出席しなくていい」「大人数講義」等であった。また、「教員の態度・様子」では、「教える情熱・意欲がない教官が多い」「同じ名前の授業でも教官が異なれば内容が違う」等があった。

権藤・藤原(2002)は、社会福祉士養成課程の学生を対象として学生用ソーシャル・サポート尺度による調査を実施した。彼らの海外研修プログラム(体験実習、ローカルボランティア)への参加経験が、その後の人間関係の捉え方に影響をもたらしたかどうかを検討した。

7. 教職の心理

学校教員の継続教育、教員研修の方法については、富田(2002)、大芦(2002)があった。富田(2002)は、幼稚園教諭、保育園保育者に対して、ビデオ自己評価法を用いた援助スキルの研修方法の開発研究をおこなった。ビデオ自己評価群と、チェックリスト自己評価群を設定し、援助スキルチェックリスト得点と、自尊感情尺度得点との関連をみた。

大芦(2002)は、中学校教員免許認定講習に参加した現職教員を対象として、自らの講義「教育心理学(教職科目)」の講義内容に関する事後評価アンケートをおこなった。授業の内容は、「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」のうち前半を学習、後半を発達としたもので

あり、教育評価は除いた。15回分のうち、興味、関心、実践性ともに低い評価であったのは、教育心理学、発達、学習の歴史的背景等の内容であった。比較的高い評価を得たのは、記憶、知識、動機づけ等であった。教育現場の諸問題を考えるうえで、潜在的に手がかりを与える可能性を持っている内容が高かったとした。

指導法についての意識調査には上岡(2002)があった。上岡(2002)は、小学校教諭に対して、1) 小数、分数の適切な指導学年について、2) 小数、分数の指導順序について、3) 導入学年、導入順序の根拠についてのアンケートをおこなった。小数、分数いずれも3年生で導入することが適切と見る割合が多かった。したがって、4年生を導入時期とした新学習指導要領算数科とズレがみられた。

若井(2002)は、中・高校への教育実習生の日誌を論理分析し、教育実習の教育的効果についての考察をおこなった。あわせて、提出ずみの5層8面モデルに関わる検討を加えた。

小林敬一(2002)は、小学校教師を対象にして、教育評価をキーワードとした連想語を求めた。そして、イメージマップを作成したところ、特徴的な以下の6つのタイプが見られた。それらは授業優位、授業と成績評価優位、教育評価方法の類型優位、学校・学級経営優位、教育行政・制度優位、多様な側面であった。

比留間(2002)は、現職教員と教員養成系大学院生に対して、R.J. Sternbergの教師自己評価用思考スタイル質問紙、児童・生徒評価用思考スタイル質問紙の両方を実施して、日本語版の作成をおこなった。児童・生徒評価用思考スタイル質問紙には、もっとも優秀であった児童・生徒一人を思い浮かべてもらい回答を求めた。両尺度得点間の相関係数を求めると、7つの下位尺度のうち立案型、順守型、微視型、革新型について優位な正の相関関係が見られた。教職年度と下位尺度との相関係数を産出したところ、教師自己評価用思考スタイルでは、年齢と保守型の間に優位な正の相関関係が認められた。理想とする児童・生徒評価用思考スタイルでは立案型、評価型、巨視型、革新型と優位な正の相関値が得られた。

引用文献

アレン玉井光江・柄田 毅 2002 公立小学校での「総合的な学習の時間」における英語活動の分析 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 427.

安藤史高 2002 自律性の欲求が自律性支援の効果に及ぼす影響 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 267.

安楽朋陽・仮屋園昭彦・高橋 豪・中國良彦 2002 大

学生の学習観に関する研究(Ⅱ)―大学時代の学習観― 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 625.

荒木正昭 2002 理科学習への関心・意欲、及び、体験的学習の効果 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 173.

藤村宣之 2002 教授・学習研究の動向―教授・学習の心理学から教科教育への提言― 教育心理学年報, 41, 94-103.

藤田哲也・田中あゆみ 2002 大学生による授業評価に関する心理的検討Ⅲ―受講態度等の自己評価、教員の授業の仕方の評価と、目標志向及び原因帰属との関係― 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 264.

権藤真織・藤原明子 2002 経験的学習が『人間関係』の捉え方におよぼす影響についての予備調査② 学生用ソーシャル・サポート尺度による調査―福祉系専門学校での学校生活を通して― 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 631.

平野 緑・大久保義美・阪 美里 2002 情報処理教育の実践的研究(2)―パソコン苦手意識の世代差― 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 424.

比留間太白 2002 教師の試行スタイル―教師用思考スタイル質問紙日本語版の作成と予備的検討― 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 349.

市原 学・新井邦二郎 2002 高校生における学業的自己概念の性差・コース間の差 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 255.

犬塚美輪 2002 他者の文章を評価する話し合い活動は作文の学習に有効か 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 58.

磯田貴道 2002 英語文法学習の有効性の認知―学習者はどのように考えているか― 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 169.

神田真理子 2002 児童は物語をどのように読み深めるか(2)―グループ活動が物語り文理解に及ぼす効果― 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 529.

金田茂裕 2002 小学生の混合液体の温度判断に関わる知識と方略 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 179.

金子重成・守 一雄 2001a 動機づけに関する心理学的研究の動向―ERICを用いた計数的分析― 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究, 2, 45-54.

金子重成・守 一雄 2001b 学習成績・学習方略と動機づけとの関連に関する研究の概観 信州大学教育学部紀要, 103, 167-177.

木村 純・丸山真名美 2002 高校生における漢字の書

- き取り一誤答パターンの分析— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 426.
- 小林寛子 2002 体験型学習における理解・発見を促す要因—話し合い活動と理解目標教示の効果— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 432.
- 小林敬一 2002 「教育評価」に対する小学校教師のイメージ 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 252.
- 向後千春 2001 質問書方式の心理学授業の良さの規定要因 日本教育心理学会43回総会発表論文集, 64.
- 向後千春 2002 心理学授業における「大福帳」カードの利用と効果 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 340.
- 小池孝彦 2002 学習動機・学習行動・歴史態度と歴史知識・歴史的思考力の関係 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 522.
- 栗山和広 2001 教授・学習研究の動向—認知心理学から教育の実践化へ, そして教育実践から認知心理学の理論化に向けて— 教育心理学年報, **40**, 102-111.
- 益谷 真 2002 日本人の英語学習に関する行動科学的検討—(IV)英単語の音声化に関する暗黙のルールの見見— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 357.
- 森川理美 2002 matched-guise 技法による言語態度の測定—トンガ王国の日本語学習者(三言語学習)と非学習者(二言語学習)の比較— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 346.
- 村山 航 2002 テスト形式が学習方略に与える影響 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 59.
- 中村飛鳥・宮原道子 2002 英語の聴解に及ぼす速度とポーズ, 個人差の影響 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 183.
- 中西里果 2002 音楽演奏指導における動きメタファ—の教授の効果 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 352.
- 中西良文・久利恭士・伊藤敏雄・布施光代・大賀梨紗・駒井恵里子・安藤史高・矢木 修・藤田高弘・速水敏彦 2002 個別学習アシスト教室に関する研究(5) 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 535.
- 中澤 潤 2002 学習マンガ教材の効果に及ぼすマンガ読解力の影響 千葉大学教育実践研究, **9**, 13-23.
- 中園良彦・仮屋園昭彦・高橋 豪・安楽朋陽 2002 大学生の学習観に関する研究 (III) —人間の学びが成立する要因— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 626.
- 西口利文 2002 問題場面の教師の言葉かけを学ぶワークシートの実践効果について 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 526.
- 大芦 治 2002 現職教員からみた「教育心理学」の講義内容 千葉大学教育実践研究, **9**, 137-146.
- 織田揮準 1991 大福帳による授業改善の試み 三重大学教育学部研究紀要 (教育科学別冊), **42**, 167-169.
- 小方涼子 2002 心理学授業における目標志向性の影響 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 262.
- 岡本真彦 2002 文章題分類課題における目標明示の効果(2) 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 534.
- 小野寺淑行 2002 一般性を欠く文字式による照明—いかにして高校生に気づかせるか— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 181.
- 大島 純・丸野俊一 2001 共同学習から協調学習へ: その教授効果の検討とCSCLシステムの役割 静岡大学教育実践総合センター紀要, **7**, 77-91.
- Roberts, R.M. 1989 *Serendipity: Accidental discoveries in science*. New York: Wiley. (安藤喬志 (訳) 1993 セレンディピティー—思いがけない発見・発明のドラマ— 化学同人)
- 坂本美紀 2002 割合文章題における解決支援の効果—1年後の遂行成績から— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 172.
- 作間慎一 2002 悪が善になる物語として『ごんぎつね』を読む子どもたち—子どもたちは最初から主題をとらえる— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 53.
- 佐藤朗子 2002 大学生の学習観と好まれる知識伝達の形態 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 54.
- 佐藤 淳 2002 経済現象に関する素朴な認識の形成に寄与する要因の検討—商品の価格規定因に対する判断をめぐって— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 519.
- 佐藤浩一・松島一利 2002 読み手からのフィードバックが説明文の産出に及ぼす影響 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 45.
- 澤泉重一 2002 偶然からモノを見つけたす能力—「セレンディピティ」の活かし方— 角川書店 (角川テーマ21 c-52)
- 神藤貴昭 2002 高校から大学への学業文化の変容に対する適応過程について(3)—大学に入学して何に驚いたか— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 527.
- 杉山憲司 2002 達成感・満足感と学生生活の質(QoSL)の関係 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 259.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 2001 テストへの対処行動の継時的変化とストレス状態との関連 心理学研究, **72**, 290-297.
- 多鹿秀継 2002 子どもの算数問題解決過程における知

- 識の分析(1) 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 170.
- 高橋 豪・仮屋園昭彦・安楽朋陽・中國良彦 2002 大学生の学習観に関する研究 (I) —受験時代の学習観— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 624.
- 田中あゆみ・山内弘継 2002 4つの達成目標と学業遂行, 努力の関連性 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 257.
- 田中 一 1999 さよなら古い講義—質問書方式による会話型教育への招待— 北海道大学図書刊行会
- 谷田 薫 2002 カレッジ・コミュニティ調査の分析 (II) —進学・在学理由と生活充実度— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 268.
- 立木 徹 2002 課題の違いが統計データの解釈に及ぼす影響 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 48.
- 富田久枝 2002 ビデオ自己評価法の効果に及ぼす要因の検討—自尊感情からの検討— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 251.
- 宇田 光 2002 当日ブリーフレポート方式による講義に関する研究(4)—スケーリング・クエスチョンの導入— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 339.
- 植木理恵・清河幸子・岩男卓実・市川伸一 2002 テーマ学習における自己制御的活動の支援—地域における実践活動から— 教育心理学研究, **50**, 92-102.
- 上岡 学 2002 小数と分数の指導順序に関する研究(2) —小学校教員を対象として— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 177.
- 植阪友理 2002 数学における図表の利用と有効性・困難性の認知との関連 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 176.
- 梅本明宏・中川恵正 2002 モニタリング自己評価を用いた教授法の効果の検討—小学校の社会科— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 341.
- 若井邦夫 2002 教育実習の教育的効果について—その3. 効果の構造的把握の試み— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 425.
- 山縣宏美 2002 電流のメンタルモデルの一貫性に関わる学習者の要因—学習目標志向性との関連— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 525.
- 山森光陽・古家正暢 2002 「平和の文化」創造カリキュラムと中学生の対抗文化との相克—「総合的な学習の時間」の成果は, 実生活に転移するのか— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 343.
- 山崎茂雄 2002 「カット・イメージ読解法」の研究(5) —本文分割数の多少で分離, 比較したカット・イメージ教示の効果— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 618.
- 吉田 甫 2002 割合問題で演算方略がどのように選択されるか 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 186.
- 湯澤正通・松内隆泰 2002 実験さえすれば理科の授業は分かりやすいのか? —物理現象の理解における数学の役割— 日本教育心理学会44回総会発表論文集, 187.